

「平気だよ。ぼく『ゾンビ』だって見るんだもの」
祖父にテレビで見た映画の話をする。
「神様の作った化け物は怖いね。人間は到底、及ばない」
「神様？ ウイルスでなるんだよ」
ぼくは首を傾げた。
「ウイルスは自然のものだろう。だから神様だよ」

ぼくは祖父の言うことをすべて理解していたわけでは
ない。祖父も期待してはいないようだった。
餅の浮かんだ蕎麦が置かれ、ぼくは夢中で平らげる。祖
父はいつもつまみを頼むだけだった。それにも、ほとんど
手を付けず、煙草に火を点ける。

一本の煙草を大事そうに喫む祖父の姿が今も目に浮かん
だ。

屋間、講釈を垂れていたにも拘らず、ぼくは寢床で震え
ていた。映画のセットや滑槽とさえ考えていたせむし男の
姿に怖気を振っていたのである。

障子越しに声をかけると祖父は眠たげに迎えてくれた。
ぼくは、祖父の布団から染みの浮いた天井を眺める。半
世紀前に建てられた家屋は、存外に広かった。

墓前へ煙草を供えるために封を切り、一本啜えて火を点
ける。家族の中で煙草を喫うのは、ぼくだけだ。

「お腹、空いたでしょ？ 精進落とし食べに行こう」
母に声をかけられる。
「もうちよっとだけ」
考えてもいなかった言葉が口から滑り出していた。葬儀
は済み、もうすべきことは何も無い。

本堂に戻って行く母の背中を見送り、ぼくは一人になっ
た。喪服の隠しから煙草の箱を取り出す。煙を吸い込んで
空を仰いだ。

雲ひとつない。しかし、これでは駄目なんだ。ぼくは真
新しい死体を漁るせむしの助手よろしく、墓の周りをぐる
ぐる回る。

暗黒の雲が太陽を覆っていなければならなかった。

ぼくは天へ腕を掲げる。
「この屍に力を与え、甦らせたまえ！」
博士の台詞はこんなふうだったと思う。ぼくの脇に助手
が現れ、手術台に死体が載せられた。この冒涇に耐え切れ
ず、太陽は雲に隠れ、稲光が空を劈く。
「生きてる、生きてる！」
だが、博士ならざる身に奇跡を起こす力はなかった。

文・ドーナツ

フランケンシュタイン

銀幕の思い出

銀幕の思い出

フランケンシュタイン

「先生。今日は『フランケンシュタイン』でございますよ。
坊ちゃんには少々、恐ろしい話かもしれません」
隣近所の人々から祖父は『先生』と呼ばれていた。それ
は彼が郷土史家であり、高校の教師を長年、勤めていたた
めである。
「……そうですか」
小屋の主人の言葉に祖父は迷っているふうであった。
映画の帰りは蕎麦屋に入る。そう決まっていた。

後へ従う。

リールが巡り、白い幕に影が映し出される。忙しなく瞬
く影は、やがて収束し、ひとつの像を結んだ。
モノクロームの画面はフィルム傷が目立ち、俳優の動
きも滑らかではない。字幕は七五調だ。
映写技師さえ居眠りし、客の抗議の音がぼくを自覚めさ
せる。思えば、不真面目極る映画鑑賞であった。
両親は共働きで忙しく、ぼくはよく祖父父母の家に預けら
れていた。
祖父は変わった気風の人物だった。煙草の銘柄、衣服の
型や色、起床就寝の時間まで決まっている。その伝で土曜
は映画館へ出かけたものだ。誘われたぼくは、喜び勇んで

銀幕の思い出



(c) 2014 トーナツ

twitter: donut_no_ana
blog: donutno.hatenablog.com

使用ツール： 折本イデオTtee
 パイン・プロジェクタ
使用フォント： 刻明朝Regular
 フリフォントの樹
使用画像： フランケンシュタイン
 ヒューマングラフィック2.0